

## 5 洞不全症候群の診断における各種検査法の有用性の検討

廣木 次郎・保坂 幸男・高橋 和義  
袴田 崇裕・酒井 亮平・西田 耕太  
須藤 洸司・田中 孔明・土田 圭一  
小田 弘隆・地主 雅臣\*

新潟市民病院 循環器内科  
新潟大学医学部保健学科\*

【目的】ペースメーカ植込み術を施行した洞不全症候群（以下 SSS）の診断における各種検査法の有用性を検討する。

【方法】2011年9月から2015年8月までに、当院で SSS に対してペースメーカ植込み術を行った56例を対象とし、診断に至った検査方法を検証した。

【結果】3秒以上の洞停止または40拍/分未満の洞徐脈をモニタ心電図で記録されたものは25例、Holter心電図で記録されたものは26例であった。そのうち症状と徐脈の関連が示されたものは、モニタ群で22/25例、Holter群で10/26例であった。心臓電気生理検査に進んだ、モニタ心電図の4例、Holter群の9例では、SSSを示唆する所見がみられたが、両群で1例ずつは洞機能の顕著な異常を認めず、植込み型ループレコーダーにより SSS の診断が得られた。

【結語】Holter心電図および心臓電気生理検査で軽度の洞機能異常しか認めない症例においても、植込み型ループレコーダーは SSS の診断に有用であった。

## 6 左心系弁膜症術後遠隔期の高度三尖弁逆流に対する外科治療患者9例の検討

柏村 健・藤木 伸也・渡邊 達  
林 由香・尾崎 和幸・南野 徹  
名村 理\*・青木 賢治\*・岡本 竹司\*  
土田 正則\*

新潟大学医歯学総合病院 循環器内科  
同 呼吸循環外科\*

【背景】左心系の弁手術後の高度三尖弁逆流の手術適応は、左心不全や右心不全がないときとされ

ているが、利尿薬の追加・増量でコントロールされている間に、右室拡大、右室収縮障害がすすみ、手術を行うときにはうっ血性臓器障害が進行していることがある。

【方法】2009年から2016年の間に、左心系弁膜症術後遠隔期の高度三尖弁逆流に対して当院で手術を行った9症例について検討した。

【結果】手術時年齢は67±4歳、全例女性で、先行する左心系弁膜症手術時の年齢は37±11歳であった。全例で経過中に浮腫の記載があり、6例には肝腫大や肝変形が、3例には腹水がみとめられ、T-Bil 1.9±0.7mg/dl、e-GFR 41±14ml/minであった。7例で左心系の弁術を同時に行い、三尖弁単独手術は2例であった。手術死亡はなく全例退院できたが、経過中に4例を失い、重篤な合併症や、心不全イベントも見られている。術前後のカテテルデータを振り返ると、右房のv波は小さくでき心拍出量は増加しきっているが、平均右房圧や平均肺動脈楔入圧が下げられていないケースがあった。

【結語】左心系弁膜症術後遠隔期の高度三尖弁逆流に対する外科治療では、術前後の評価や術後管理に課題が残る。

## II. テーマ演題「高齢者循環器疾患の治療」

### 7 慢性大動脈解離を有する連合弁膜症の高齢者に対する手術経験

武居 祐紀・木村 光裕・山本 和男  
岡本 祐樹・浅見 冬樹・水本 雅弘  
榎本 貴士・吉井 新平

立川メディカルセンター立川総合病院  
心臓血管外科

症例は85歳、女性。平成28年3月に労作時息切れを自覚し、4月に前医受診。精査で大動脈弁狭窄症と診断され、術前精査を進めていたところ、6月に施行した造影CTで弓部大動脈の限局性解離を認め、当科紹介、大動脈解離の診断で入院とな